

きに送らんと、大阪の東約四里強なる某村に赴むいた、そこには同好にて、又私の最も親しき友が假寓して居るのである。宅

を出てしは、未だ拂曉に近く、初冬とは云へ、寒さは身を切る思ひ、加ふるに、冷たき風は吹きしきりて齒の根も合はぬ程なるを、辛じて勇氣を起し足を運ぶ友の家に着きし時は、早や日は東天に高く、落葉たく煙の薄らぎたる頃なりき。少憩の後、再びスケッチ箱を肩に、友と近間を流るゝ少なき野川を寫すべく出かけた。空は、今は高くコバルト色に變りて、遠景はさゝやかなる松の繁みにて、中景には朽かゝれる土橋と芦、其他名も知れぬ雜草の枯れたるが、靜かにゆらげる水の面に影をひたせるあり、前景には破れたる捨小舟の、草叢に横はれるがありて、初冬の氣は一寸の地にも満ち／＼て居るのである。私は友と三脚を並べ、共に筆を運ばした。然し拙き私には此位置は誠に不適當なのであるが、いつもの負嫌ひを出し苦しき事も強き自信にて、之れに打ち勝ち、漸く着彩となりて一息なし、友を眺むれば、彼は希望に輝やける眼を以て自然に對しつゝ。彼の身邊には、いつの間にか多くの田吾作や、はなたれ小僧や、村娘など集まりて、何をかさゝやいて居る。着彩の漸く終るに間もなき頃、暮るゝに早き冬の日ば西山に隠れ、名残の夕焼は、遠き森、近き小川を赤く染めなして、歸鴉は、をちこちを飛びて夕を告ぐるが如くに啼渡る。私等にこゝに筆を洗ひ後目を約して、彼の友と、この好き自然とに別れを告げたのである。さらば親しき自然よ、幸に永久に健在なれぞして吾等同好に多くの

教訓を與へよ。いざさらば。

會友諸君へ御相談

一會友

日本水彩畫會の規定の一部が改正されて先生に御批評を願ふ繪は是迄毎月であつたのが隔月になつた。種々水彩畫發展のため繁多な御用の多い先生の勞を増すといふことは會友の増した喜びは別として先生のために千萬御氣の毒の譯で。改正に就ては何等異議なきのみならず吾々の方でもつと早く氣をつけて御遠慮申さなければならぬ次第であると私は思ふのである。それで世間を見ると、たかが十七字三十一字の俳句や歌を見て頂くのにも一句何錢といふて添削料を差出さねばならぬ。然るにそれ等と異つて面倒で時間潰してその上誰れにも出来ない初學者の繪の批評を願するにいくら先生の方で報酬は入らぬと言はれたとて平氣で御批評をうけるといふことは實に虫のよい話だと思ふが。然し先生の宣言で見ると金錢づくでやつて下さるのでないから一枚何程と極めて差上ても快よく受けては下さるまいと思ふ。此處諸君何とかよい御智恵を出して先生に御迷惑をおまりかけず吾々も相應の報酬を出して今後は批評を願ふやうにしたいと思ひます。如何。

* * * * *